

【十月の言葉（令和六年）】

自分の行いが自分をつくる。

「卵毛・羊毛のさきうもろう ようもろうにゐる ちりばかりもつくる罪の、

宿業にあらざといふことなしとしるべし」（歎異抄）

私たちが発する些細ささいな言葉や、ちよつとした振る舞いにもそれまでの生き方が表れています。初対面の人との会話の中にも、その人の普段の考えや経験を垣間かいまみ見ることができるとしよ。

親鸞は、「よきところのおこるも、宿善のもよほすゆゑなり」（九月の言葉で紹介）に続いて、「うさぎや羊むじかの毛の先についているちりほどの小さな罪でも、前世・過去の行いによらないものはない」と言います。

どんなに小さなことでも、日々の行いや考えは積み重なって、自分自身をつくっていきます。歳を重ねたとき、どんな自分になっているかは、現在の自分にかかっているのです。